葦毛通信（いもう）

カザグルマ

令和元年６月 13 日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町３丁目１
TEL：0532-56-6060
No. 82

1、平成30年度葦毛湿原の動物調査

昨年に引き続き、2019 年３月末までの一年間、二の沢で自動撮影カメラによる動物の定点観察を行い、平成 30 年度の撮影回数は延べ 42 回でした。平成 29 年度の撮影回数は延べ 68 回、平成 28 年度は 147 回でしたので、撮影回数はさらに減少しました。平成 28 年４月 23 日に三の沢から二の沢にカメラを移動しました。二の沢は平成 27 年度に木の伐採作業を行い（葦毛通信 No.36 参照）明るく開けた裸地になりましたが、抜根を行わなかったため、すぐに切り株からヒコバエが出て、草本も繁茂し、見通しが悪くなりました。

動物は木の伐採直後の平成 28 年度には 147 回と多く撮影されましたが、植物が繁茂し見通しが悪くなるにしたがって撮影回数が減りました。６月には昨年と同じようにセンサーカメラの受光部にクモが巣を作り、クモの巣の影響で撮影ができなかったのですが、この影響はあまりないようです。

平成 28 年度は木を伐った直後で見通しの良い草地という状況でしたが、この状態が、動物にとって活動し易い環境だったことがわかりました。今年３月には二の沢をバックホーで抜根して裸地化しましたので、動物の撮影回数が増える可能性があると予想しています。

番号	種　名	総数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	ニホンイノシシ	4					2	1			1			
2	ニホンノウサギ	12	7	1	1			3						
3	ホンドタヌキ	0												
4	ホンドキツネ	4	1					2		1				
5	ハクビシン	2							2					
6	ニホンイタチ	2	1					1						
7	ホンドテン	4							1				3	
8	ニホンリス	0												
9	ニホンアナグマ	1				1								
10	ヤマシギ	1	1											
11	コジュケイ	0												
12	ノネコ	2					1		1					
13	ニホンカモシカ	7			2		1	2				1		1
14	ハシボソガラス	0												
15	ハシブトガラス	1							1					
16	不明	1								1				
	合　計	41	10	1	3	1	4	9	5	2	1	1	3	1

表１　種別撮影回数一覧表

１）調査方法

平成 30 年度は、二の沢のＴ地点で引き続き撮影を継続しました。撮影方法はこれまでと同じで 24 時間自動で写真と動画撮影を行っています。実施期間は、前年から継続し、2019 年３月 31 日までのデータです。

撮影は、昼間はカラー、夜間はモノクロになっています。これは、夜間撮影時にカラー撮影するためには、フラッシュが必要になるので動物を驚かさないようにして、継続して調査をするためです。

２）調査結果

平成 30 年度は延べ 42 回撮影されました。内訳は表 1、図１・２の通りです。前年度の平成 29 年度（葦毛通信 No. 67）と比較して撮影回数は約三分の二に減りました。全体の傾向としては昨年と大きく異なる点も見られます。

まず、平成 30 年度の撮影回数は少なくなっていますが、撮影頻度は全体としては昨年と同じように４～10 月が多く、11～３月の冬季に少なくなっており、季節的なばらつきは同じです。

撮影された動物の種類で最も多いのは、ニホンノウサギで 12 回（29%）撮影されました。昨年は 31 回（46%）だったので、回数も割合もかなり減りました。ニホンイノシシは４回（10%）で昨年の 15 回（22%）からほぼ半減しました。この２種類で全体の 39%になりますが、昨年の半分近い割合まで減っています。

これ以外は、ニホンカモシカ７回（17%）、ホンドキツネ・ホンドテン各４回（10%）、ハクビシン・ニホンイタチ・ノネコ（イエネコ）各２回（５%）、ニホンアナグマ・ヤマシギ・ハシブトガラス・種不明各１回（２%）となっています。

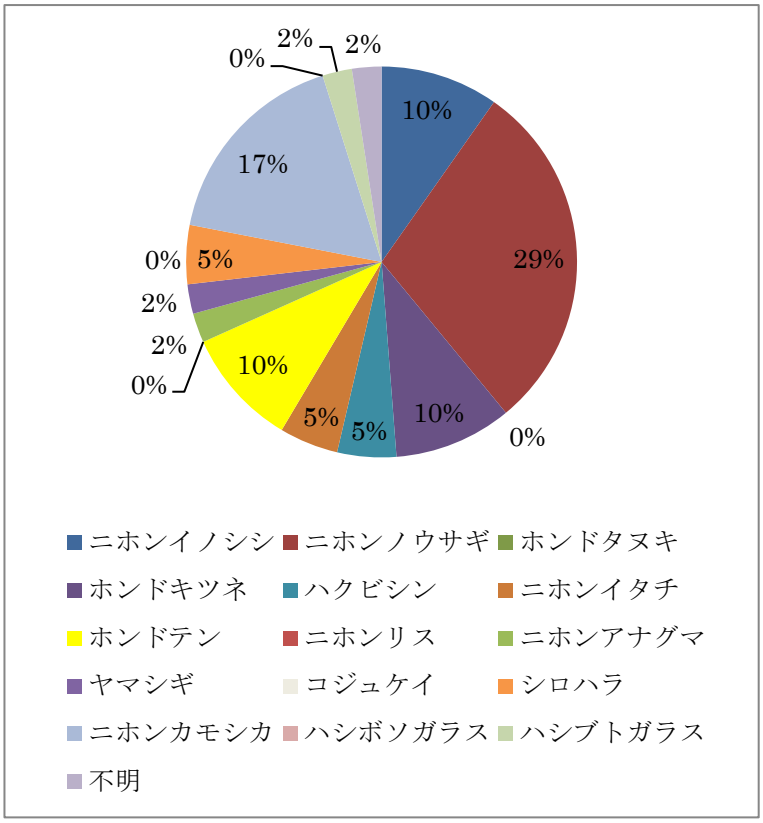


図１　種別撮影回数割合

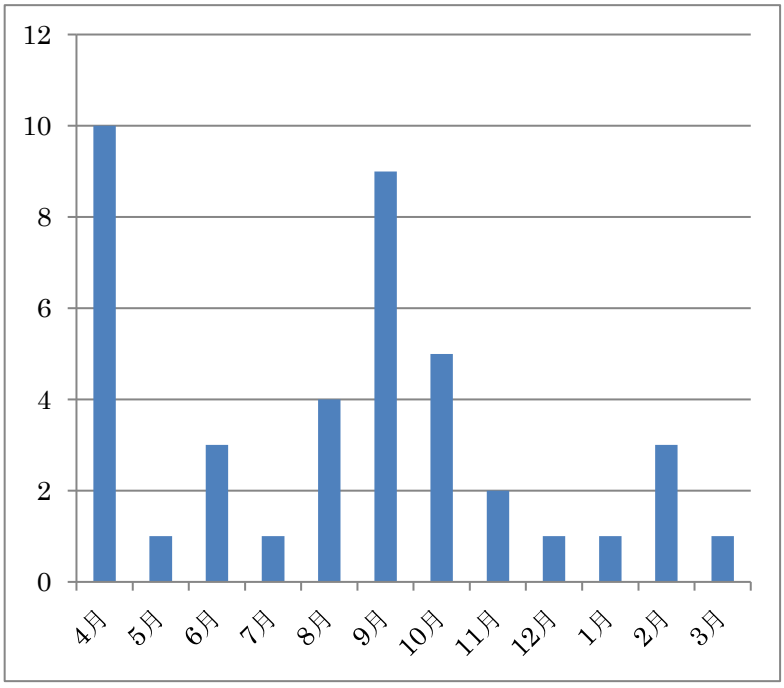


図２　月別撮影回数

撮影回数ではニホンカモシカとホンドテンが大きく増えました。ニホンカモシカは日中でも湿原内に出没しており、湿原の見学者が見る機会も増えています。しかし、今のところニホンカモシカによる深刻な食害は見られません。葦毛湿原背後の山にはニホンジカもいますが、まだ葦毛湿原内には降りてきていないようです。

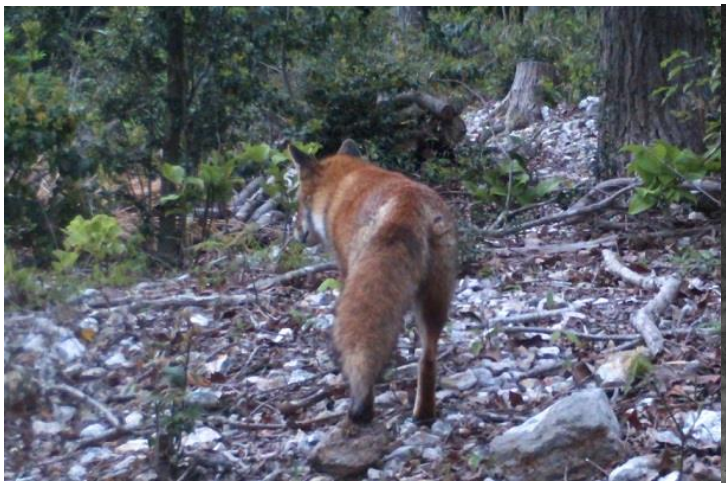
下の写真は昨年度に撮影された主な動物です。ニホンカモシカは夜だけではなく、昼間も撮影されるようになりました。背後の山では子連れのメスや、若い個体も観察されており、葦毛湿原背後の山で繁殖しているのは間違いありません。昨年、ホンドタヌキは撮影されませんでしたが、ホンドキツネは４回撮影され、昼間も夜間も出てきているようです。写真にはありませんが、ノネコ（イエネコ）が昼間も夜間も撮影されています。近くの住宅地から侵入してきていると思われます。住宅地からは500m以上離れていますが、行動範囲に入っているようです。

ニホンカモシカ（2018年9月10日）

ニホンカモシカ（2018年8月18日）

ニホンノウサギ（2018年4月27日）

ニホンイノシシ（2018年8月7日）



ホンドキツネ（2018年4月14日）

ホンドテン（2018年12月1日）

2、イノシシの防御実験－3

１）これまでの実験経過

テグスを使ったイノシシの防御実験は葦毛通信 No.60・67 で報告しました。No.67 の報告以後、ほぼ一年が過ぎましたが、2018 年 12 月 18 日に 9 か所 11 本、2019 年 3 月 7 日に 3 か所 4 本の修理をしました。現在もイノシシの侵入は続き、南の山側からもテグスを飛び越えて侵入するようになりました。テグスを張る以前よりも侵入の回数と範囲は少なくなり、一定の効果はあるようです。しかし、イノシシが慣れてしまったようです。

２）新たな実験

Ｂ地点イノシシ防御実験

Ｂ地点の北東側にはウメバチソウが 60 個体ほど開花していましたが､イノシシの度重なるかく乱でほとんど見られなくなりました。そこで、ウメバチソウの復活を目的に新たに実験区を設定しました。

長さ 180 ㎝の鉄の丸棒を約 10×10ｍ四方に 60～70 ㎝程地中に打ち込んで、前回よりも太い 20 号のテグスを４段に張り巡らし木道側からも侵入できないようにしました。上写真は設置後の状況です。

説明看板

葦毛湿原では、植生回復作業の内容やイノシシの防御実験、ホソバリンドウの人工授粉等様々な説明看板を木道沿いに設置しています。光沢のある厚手のＡ４写真用紙に写真を添えて印刷し、四隅を３㎝ほど三角形に切り落とし、四辺を５ミリずつ切り落としてパウチフィルムで加工し、四隅と四辺を布のガムテープで補強し、四隅に穴をあけてＰＰテープで、150 ㎝のアルミスティック２本に取り付けています。直射日光が当たり、特に西日が強く当たるところは１年ほどで退色しますが、日陰等条件の良いところでは最長３年ほど色を保っています。１枚 100 円程度で作成でき、内容の修正や更新も簡単にできます。